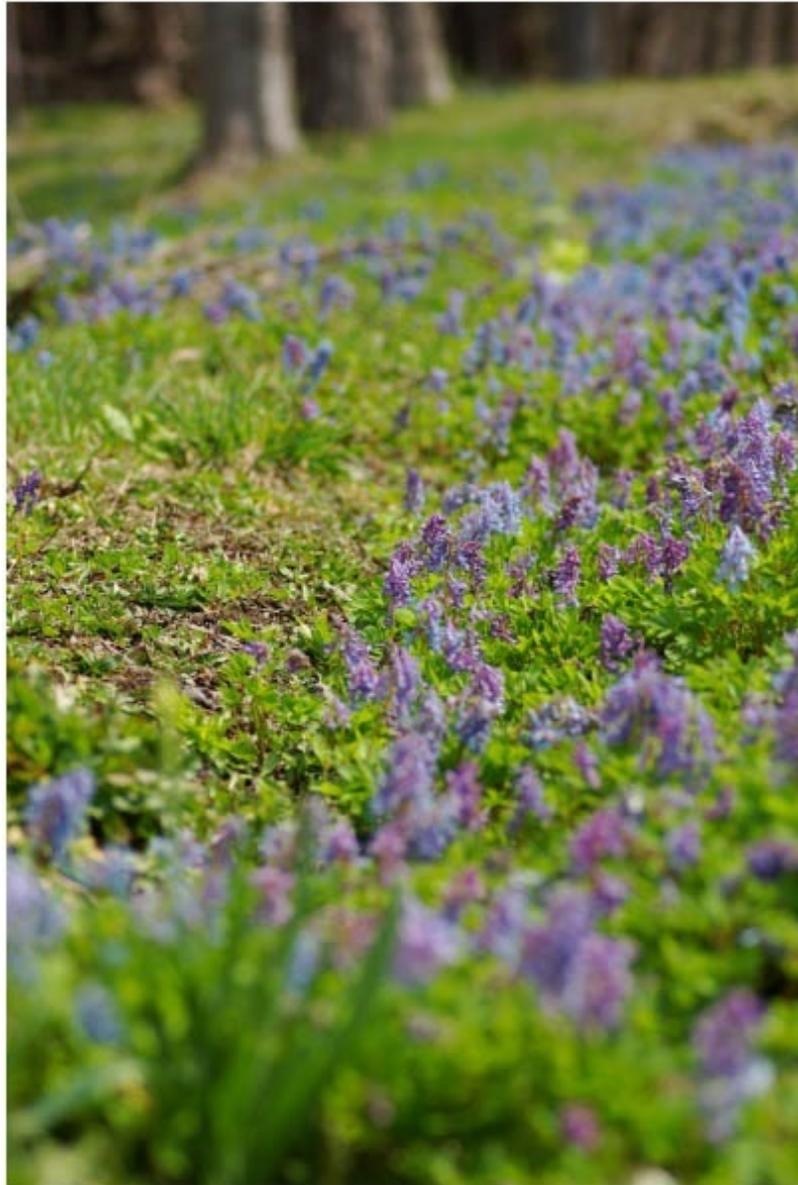
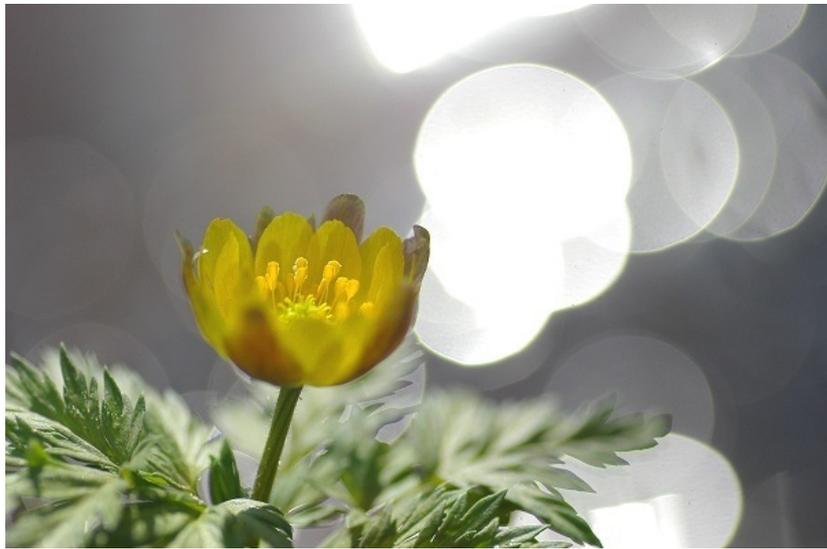


精霊たちの棲む大地

儂き花の精霊



lyric by aono
photo by hiros



冬から春へ変わる僅かな時間に

儂き花の精霊として

私は姿をみせる

遅い春の訪れを知らせる精霊として

私は姿をみせる

ひっそりと咲く小さな花達を守るため

私は姿をみせる

そして今年が私の最後の務めになるだろう



雪の下から顔を見せていたフクジュソウは

太陽の光を体一杯に受けて 元気に花開いていた

「今年も元気に顔を出したね」

私は優しく話しかける

「ええ 再び咲くことができました」

花は輝いて 花びらを広げる

隣に咲くイチゲにも私は顔を向けた

「またあえて嬉しいよ」

「私もです 精霊様」



春の初めのほんのひとときを

もてる全ての力を使って咲く花は

それだけで愛おしい

花の言葉に耳を傾け 願いを聞く

そんな私の役割も

今年で終わると思えばこそ

ひとつひとつの花の声を

しっかり聞かねばと 心に誓う



イチゲの花は訴える 仲間が少なくなったと訴える

「私はまたこの地で咲くことが出来ました

仲間の多くは どこか遠くの土地へ連れ去られ

元気かどうかもわかりません」

花びらの先から 涙のように雫がポトリと落ちる

「どうか 仲間の安否を教えてください」

彼女の仲間の悲しい最後を 教えてよいのかどうか

私は少し躊躇した



「私の仲間も減りました」

うつむきながら カタクリはポツリポツリと語り始めた

「かつて私の仲間は 群をなして住んでいました

群れはたくさんあって それはそれは賑やかでした

今はみんなさらわれて だれもいなくなってしまった所も少なくありません

でも この山では少しずつ ほんとに少しずつですが

私の仲間が増え始めています

いつか昔のようになることを 希望をもって待っているのです」

イチゲに余計なことは話すまい 私はその場をそっと離れた

このカタクリがいるのなら やがて元気になるだろう



僅かな時を 春と過ごして

儂き花達は 散っていく

私は少し疲れを覚え

風に身を委ねて しばし休んだ

その間にも次々と 春を知らせる花が開く

まだ務めが残っていると

私は気力を奮い立たせ 花のもとへと向かう



春の先駆けの花は 徐々に姿を消し また大地に還っていく

そこここに咲くエゾエンゴサクの スカイブルーの花が私に問う

「私達はいつまでこの地にいられるのでしょうか」

私は答える 「精霊の守りがある間は

たとえ一度は地上から消えたとしても いつかまた蘇る日が来る」

「もしも精霊の守りがなくなったら……」

「この大地が存在する限り

精霊が消えることも 守りがなくなることもない」



傍らで聞いていた白いエンゴサクから

安堵のため息が聞こえる

「安心しました

私達は花ばかりでなく

土の中の茎さえも

掘り返されて 連れ去られる

この先 どうなるのかと

とても不安な日を 送っていました」



エンゴサクのささめきを後に

私は次へと向かう

白い花達が 今か今かと私を待っていた

「精霊様をお待ちしていました」

私の胸に痛みがはしる

「何か困ったことがおこったのか？」

ニリンソウが私をじっと見つめて 口を開いた

「私達は心配なのです」



ヒトリシズカも唱和する

「私達は心配なのです」

「何がそんなに心配なのか 私に話してごらん」

ヒトリシズカは集まって じっと私を見上げている

「精霊様が 心配なのです」

涙のように 白い花から雫が落ちる 緑の葉からも雫が落ちる

春の花は繊細で 私の少しの変化も見逃さない

そろそろ真実を話す時 私は覚悟を決めた



ヒメイチゲやエンレイソウも集まって 私の言葉を待っている

小さな花の小さな胸を これ以上痛めないよう

私は穏やかに話をはじめた

私が精霊としてこの地に来るのは この春限り

来年には新たな精霊が この地に現れると

小さき花達に 私は伝えた

悲しむ花を前にして 私は続ける

私はかなり弱っていて これ以上 精霊としての務めは果たせない



精霊が弱るなんて どうしてですかと花は問う

精霊だとして 永久に 存在するわけではないのだと

時が来れば消えるのだと 私は答える

ここ数年で かなり弱った私は 消滅するのが早いだけ

他の精霊達よりも 消えていくのが早いだけ

私のような精霊には 海の彼方からやってくる 黄色い風は身に堪える

まとわりついた小さな砂が 薄いピンクの衣を黄色く染め

私の体を重くする



繰り返される攻撃に

黄色い風の攻撃に

私は耐えられなくなって

今年限りで務めを終える

来年になれば この地にも

私よりもずっと強い精霊が

儂き命を守るため か弱き花を守るため

力を持って現れる



精霊としての務めを終えた後

どうなってしまうのかと 幼い白いカタクリが

か細い声で 私に尋ねた

私は白いカタクリをそっと抱きしめ 言い聞かす

「心配はいらない

務めを終えたその後は 光の粒子に交じり合っ

ずっとお前達を見守っている」

幼いカタクリは頷いて 雫で光る顔をあげた



もしもあなたが山奥で

儂き花を愛でながら 早春の太陽を浴びたとき

キラキラ光る粒子を見るだろう

それは 花を守る私の姿

もしもあなたがその光を

全身に浴びることができたなら

光の粒子があなたを守る

あなたが花を愛する限り 私はあなたを守るだろう

-end-